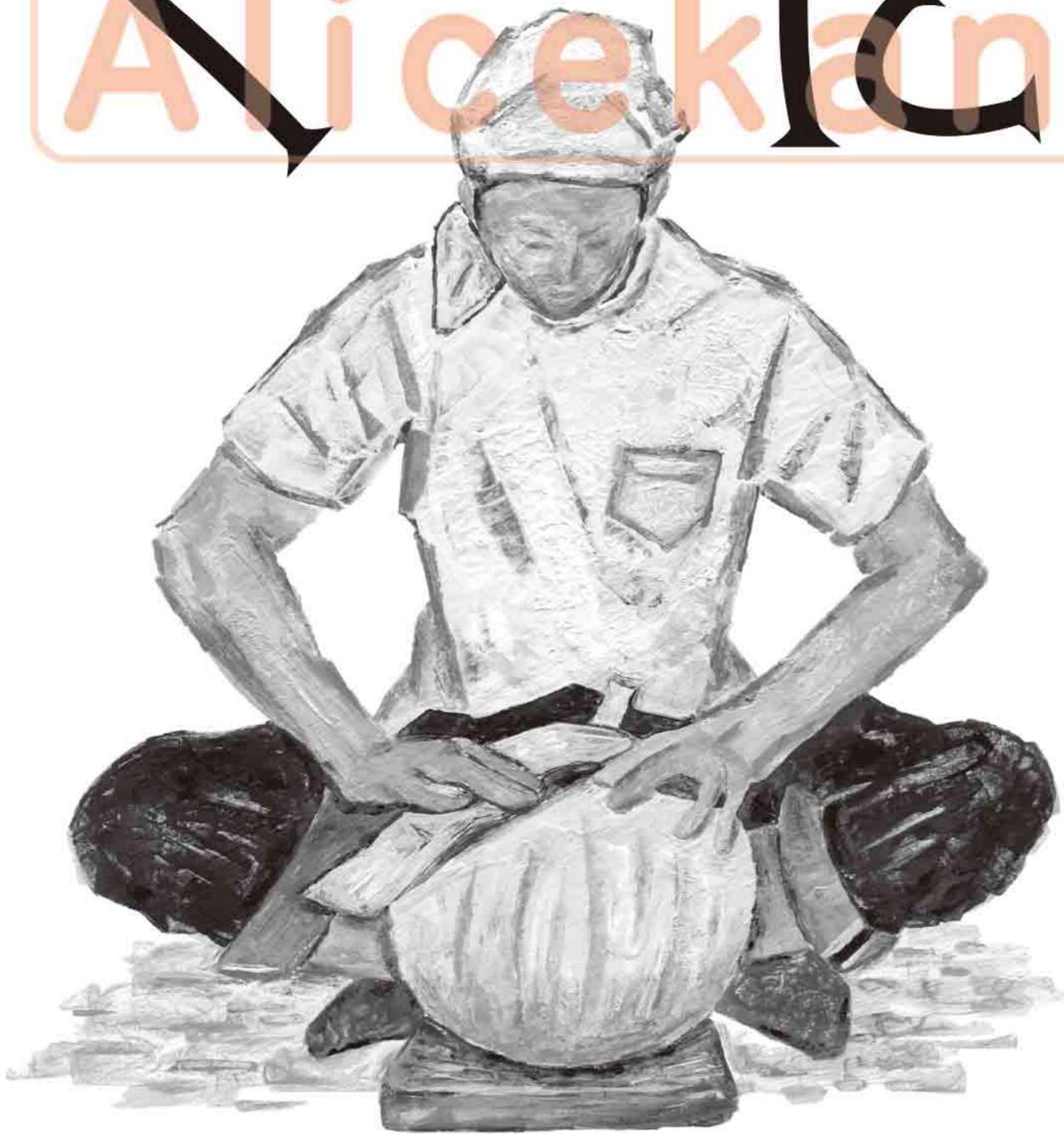


夜
空
に

いとうみく

ひ
ら
く

AliceKan



夜空にひらく

いとうみく

AliceKan

装画 杉山巧
装丁 坂川朱音

Alice kan

どん、という音のあと夜空に大きな花が咲いた。きれいな円を描いた光の花はぱりぱりと鳴りながら瞬く間に消える。

幼い頃、アパートの部屋の窓から、花火を観た。川向うに最初にひとつ、どん、とあがり、少し間を開けて、また、どん、と打揚がる。そのうち、どんどんと連続で花火がひらく。

どこからか聞こえてくる風鈴の音に蚊取り線香の匂い。窓の棧に腰かけて花火を眺めていた母は、きれいだね、きれいだね、と何度も言っていた。円人はそれを聞きながら、買い物帰りに買ってもらったラムネを飲み、瓶に入っているビール玉を取り出せないものかとカラカラと音を立てていた。母はそんな円人を見て笑みを浮かべてぽつりと言った。

——花火はね、近くで見なきゃだめなんだって。どんって、すごく大きな音がするんだって。空が花火でいっぱいになるんだって。ね、いつか観に行こう——

十二年前、五歳の夏のことだ。



オフィスビルが立ち並ぶ街の中心地を抜けて高速に乗ると、空がやけに広く見えた。

鳴海円人は車窓に目をやってため息をついた。

「酔った？」

運転席でハンドルを握る弁護士の岩切が声をかけてきた。

「いえ」と小さくかぶりを振ると、岩切はやわらかく目尻を下げた。

「トイレは大丈夫？」

「大丈夫です」と答えて、円人はまた窓の外に目をやった。見たいものがあつたわけではない。これ以上話しかけてくるな、というポーズだ。

けれど岩切はかまわず円人に話しかけた。

「鳴海君は山に登ったことある？」

「はあっ？」

「登山。おれは大学の頃、何度か。山梨は金峰山とか高川山とか天女山とか、初心者でも登れる山が結構あるんだよね」

そんな話はどうでもいい。だいたい、補導委託先へ向かっているいま、する話か。円人は興味なさげに生返事をした。それに気づいていないのか、岩切の話はその後もしばらく続いた。

岩切がおしやべりな男だということはどうすうすわかってはいた。勾留期間中、数度面会したときも、肝心の事件のことより、円人の持っていたスケボアのペイントについて興味深そうに聞いてきたり、いま流行っているテレビアニメの話をしてみたり、昨日食べた食事がどうのと、毎回どうでもいい無駄話ばかりしていた。けれどここまでとは思わなかった。

岩切はハンドルを握りながら、登山がどうのトレッキングがどうのとまだしゃべっている。円人は顔を横に向けたまま目を閉じた――。

ふっ、と目が覚めて車の時計を見ると、一時を過ぎたところだった。

二〇分近く眠っていた間に、外の景色が一変していた。

山なのか丘なのか、緑の中に赤や黄、橙に色づいた、こんもりとした木々があちこちに見える。

「起きた？ もう高速降りるから、どこかでメシを食おう」

そう言って岩切は、バックミラーを見ながら左の車線へ移動していった。

一般道に出るとスピードを落として、カーナビの指示通りに右折していく。片側一車線だった道が、いつのまにか中央センターラインのない細い道になった。右も左も畑か田んぼかビニ

ールハウスだ。

こんなところにメシ屋なんてあるのか、と円人がいぶかしく思っていると、「あった！」と岩切が指をさした。その指先のほうに目を向けると、道路わきに『食堂めだか このさき500m』とサビた看板が出ていた。

現存するんだらうか、と疑わしく思っていたけれど、たしかに店はあり、営業中の札が下がっていた。

店の横にある無駄に広い駐車場には、トラックが二台と乗用車が一台、それにバイクが三台とまっていた。岩切は店に近い場所に車を止めると、財布だけ持って車を降りた。

「おごるよ。なんでも好きなもん食べて」

そう言って岩切は店のドアを開けて、のれんをくぐった。

「いらっしやい。あ、お客さん、さきに食券買ってください。うちセルフなんで、すみませんね」
カウンターの向こうから女の人が言った。岩切はその声に愛想よく答えて、入り口の横にある食券機を眺めた。

「アジコロ定食かラーメンか」

そうぶつぶつ言いながら、「鳥もつ井がある！」と勢いよく食券ボタンを押した。

「鳴海君は？」



「これで」と、きつねうどんのボタンを指さすと、岩切は「本当に？」と渋い顔をした。

「遠慮とかしなくていいんだよ。ほら、焼肉ビビンバ定食とか餃子ラーメンセットとかさ、あ、うどんがいいならコロッケ単品でつけるとか」

「これで」

もう一度、きつねうどんを指さすと、岩切はしぶしぶボタンを押した。

「ごちそうさまでした」

円人は手を合わせて、空になった井と岩切の井を持って立ち上がった。ありがとうと岩切が言うと、円人は切れ長の目を伏せるようにして小さく会釈をし、食器を下げに行った。そのうしろ姿を、岩切はじっと見つめた。

鳴海円人、十七歳。

けっして素行が悪いわけではない。口数は少なく、愛想はないけれど、むしろそのへんでチヤラけている高校生より、堅実に生きてきたような子だ。

ただ、この子はたぶん、人を信じていない。

鳴海円人は、バイト先のコンビニで、バイト仲間である男子大学生Aを殴り、全治六カ月のケガを負わせた。

客の通報で駆け付けた警察官によって逮捕され、勾留されたのち、傷害罪で家庭裁判所へ送られた。

当初、事件は鳴海が一方的に大学生に暴力をふるったとみられていたが、二週間前にバイト先でトラブルがあったことがわかった。トラブルとは、店の売上金三万円が盗まれたというものだった。盗まれたとみられる時間帯、金庫の置いてある休憩室に出入りしたのは鳴海円人だけだった、という大学生アルバイトAの証言があり、店長は円人を問いただした。円人は終始否定したが、結局「警察には通報しないから」と言って店長は円人を解雇した。数日後、店長に証言したAが、消えた金は伝票のファイルの隙間にあると、にやけ顔で同じシフトに入っている女子高生アルバイトに話した。そのことを女子高生から聞かされた円人は、Aにはめられたことに気づき、コンビニへ行ってバイト中のAにつかみかかった。

勾留後も円人からは反省のことばはなく、事件についてもほとんど語ろうとはしなかった。

家庭裁判所での審判は、こうしたさまざまな事情と円人の家庭環境を考慮したうえで、試験観察という処分を下した。

試験観察とは、家裁送致から審判までの四週間では判断できない、という場合に出される中間的な処分のことをいい、一定期間、自宅での生活を観察したのち、改めて処分を決めるというものだ。ただし、自宅での試験観察が難しい場合、生活の場を移し、補導委託という形で行



われる。

円人の補導委託を引き受けたのは、煙火店を営む深見静一という男だ。一定期間、鳴海円人は深見の自宅で暮らし、そこでの様子を見たのち、審判が開かれる。食器を戻した円人が、向こうから足早に戻ってくるのを見て岩切は腰を上げた。

外に出ると円人は空を見上げて、腕をさすった。さっきまでよく晴れていた空が白い雲に覆われている。

「寒い？」と岩切が声をかけた。

「大丈夫です」

「こっちは甲府より標高が高いからね」

岩切は口角を上げて「行こうか」と、車に乗り込んだ。

あいかわらずの田園風景……というより田舎道をとろとろと走っていく。さっきからコンビ

ニはおろか自販機すら見あたらない。

こんなところでどうやって暮らすんだ、と円人は小さくため息をついた。

カーナビの案内に従って車は側道に入った。さっきまでとは違って、舗装されていないがたがた道だ。スピードはかなり落としているものの、車体が跳ねるように揺れる。

「この道で、あってるんですね」

円人は無意識に頭上にあるグリップを握った。

「そのはずだけど」

という岩切の不安げな声にかぶせるように、カーナビの音声案内が車内に響いた。

『この先目的地です。ルート案内を終了します』

「はあ？」と岩切は眉をひそめて、さらにスピードを落とし周囲を見渡している。

「もうこの辺のはずなんだけど。いつも肝心なところでこうなんだよなあ、カーナビってのは」
さらにのろのろと進む。途中、右へ折れる道があったけれど、そこを曲がるのであれば、さすがにカーナビも案内をするだろうと、真っすぐ進んでいく。と、いきなり視界が開けた。

おお、と岩切は声を漏らした。

正面に、煙突のような茶色い円柱があり、『深見煙火店』と書いてある。その向こうに広い空き地があり、車が数台止まっている。

「さあついたぞ」

車を軽ワゴン車の横に止めていると、坂の下にある二階建ての建物から薄いグレーの作業着



を着た中年の男が出てきた。年は、四〇代半ば……岩切と同じくらいだろうか。

岩切は車のドアを開けながら、行くよ、と円人に視線でうながした。

「深見さん！」

岩切が声をかけると、男は右手をあげてこっちへ来た。

「道、迷いませんでしたか」

「ええ、最後ちよつと。カーナビのやつに仕事を放棄されて」と、岩切は苦笑した。

「看板は出しているんですけどね、みんな気づかないって言うんですよ。もう少しでかくしたほうがいいかな」

深見はそう言いながら、岩切のうしろにいる円人に目をやり、「来たな」と笑みを浮かべた。

「荷物は？」

「これだけです」

円人が後部座席に置いてあるスポーツバッグを取り出すと、深見はちらと岩切に視線を送り、

「じゃあここに」と踵を返した。

「調査官の田所さんからもよろしくと」

「ええ、さつき連絡をもらいました。ご実家でご不幸があつたそうで」

「そうなんです。お父さんが。田所さん、鳴海君を送るって言ったんですけど、代役をさせて

ほしいって私が頼んだんです。どっちにしても鳴海君が暮らすところは見ておきたかったですし」

岩切が言うと、深見はうなずいて円人に声をかけた。

「向こうにある建物は工室だから、鳴海君は立ち入らないように」

見ると、視界の先にコンクリート造りの小さな建物が、分厚い壁で仕切られていくつか点在している。ふと、遠足で行った牧場の風景を円人は思い出した。なんとなく似ている。あの建物はたしか牛舎だったかな。

駐車場から、ゆるい坂を下っていくと二階建ての建物があり、入り口の横に『深見煙火店』と書かれた看板がかけてある。その横のドアを深見は押した。

「ここが事務所」

正面にカウンターがあり、その上に電話と『御用の方は、お手数ですが内線番号 ×××××までお電話ください』と書かれたスタンドがある。

カウンターの向こうは、広いスペースになっていて、部屋の真ん中に長テーブル、窓際には丸テーブルが二つ並んでいる。

「打ち合わせスペースってことになってるけど、実際のところは休憩スペースってところだな」
深見は笑いながら、左手にある階段を上がっていった。そのあとを、岩切、円人が続いた。

「どうぞ」と、階段を上がりきった正面にあるドアを開けると、事務机が向かい合わせに四つあり、少し離れたところにもう一つ机があった。どの机の上にもパソコンがのっている。

「ここが事務室ね。そっちのついたての向こうは一応、応接室」

ほら、と深見がついたてを動かすとソファとローテーブルがあった。

小学校の職員室にもこんな空間があったなと円人は思い出していた。あの席に座って談笑している教師と保護者らしき大人を何度か見たことがある。どことなく教師たちが気を使っているのが見てとれた。少なくとも祖母がああ席に通されたことは一度もない。そもそも祖母が学校に来たのは、両手の指ほどもないけれど……。

「で、向こうが給湯室で」と言う深見の声に「静さん」と、女の声がかぶった。振り返ると、シヨートカットの初老の女の人が入ってきた。

「遠いところまで、お疲れになったでしょ」

女の人がこちらへ、と、ついたての向こうに手を向けると、深見は「ああ、そうだった」と、応接室のソファに円人と岩切を座らせた。

「よく、せっかちって言われるんです」と、深見はさして申し訳なさそうでもない口ぶりであり、声をたてて笑った。

ほどなくして、さっきの女の人給湯室から出てきた。手には湯呑をのせた盆を持っている。

「桜ちゃんがお休みだっというから、顔を出してみたんですけどね、来てよかった」

そう言いながら、岩切と円人の前に、蓋ののった湯呑を置き、深見の前には魚偏の漢字がびっしり書いてある大ぶりの湯呑を置いて、給湯室へ戻っていった。

「どうぞ冷めないうちに」

と、深見が魚偏の湯呑を手にとると、「じゃあ、失礼して。鳴海君も」と、岩切も湯呑に手をかけた。

「まち子さん、手が空いたらお願いします」

深見が給湯室のほうに声をかけると、お茶を持ってきた女の人が顔を出した。

「紹介し忘れましたが、深見まち子さん。おれの母親です」

「深見まち子です。よろしくね」と、円人の目を見て口角をあげた。

「主にまち子さんには家のほうのことをお願いしてるから、ま、言ってみれば寮母みたいな感じかな」

「寮母」

円人がつぶやくと、深見はうなずいた。

「うちには鳴海君のほかにも、職人が二人住んでるから、食事の支度とかアレコレ。鳴海君の部屋も、昨日まち子さんが掃除してくれたんだよ」

